千葉市土気城跡

２００８

株式会社　エヌ・ティ・ティ・ドコモ
財団法人　千葉市教育振興財団

千葉市土気城跡

２００８

株式会社　エヌ・ティ・ティ・ドコモ
財団法人　千葉市教育振興財団

例　　言

1．本書は千葉市緑区土気町815の一部に所在する、土気城跡の発掘調査報告書である。調査は、㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモによる携帯電話無線基地建設工事に伴い、㈶千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが、千葉市の委託を受け、平成19年度に発掘調査を行い、同年度に整理を実施した。

2．発掘調査の期間・面積・担当者は下記の通りである。

平成19年７月２日～平成19年７月23日　本調査　212.9㎡　担当者　菊池健一

3．整理作業は、平成19年７月22日～平成19年８月２日に、菊池健一が担当して行った。

4．遺構の写真撮影は発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は青柳すみ江が行った。

5．出土資料及び調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

6．発掘調査から報告書刊行まで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜った。感謝申しあげる。

千葉県教育庁文化財課 千葉市教育委員会生涯学習振興課文化財係　㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ　鈴木正貴　渡辺修一（敬称略）

凡　　例

1．本書で掲載した遺構図等の方位は真北である。標高については、海抜高で表示した。

2．各遺構の調査区内における位置は、小グリッドを基本として表示している。複数グリッドにかかる場合は、面積を最も多く占めているグリッドで表している。

3．遺構・遺物実測図の縮尺は基本的に下記の通りとし、図中にスケールで表示した。

竪穴住居跡1/60　掘立柱建物跡1/60　地下式壙1/60　井戸1/40　土壙1/40　溝状遺構1/100

大型土器1/8　土器片1/3・1/4　剥片石器1/1　砥石1/3　鉄器1/2　鉄滓1/3　銭1/2

4．遺物観察表の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省発行）を用いて表記した。

5．遺物観察表の数値で、口径・底径の（　）は復元推定値を、器高の（　）は残存高を表示している。

6．写真図版の遺物スケールは縮尺不同である。

7．遺構・遺物実測図におけるスクリントーンの表示内容は下記の通りである。

焼土範囲　　遺物赤彩

目　　次

例言
凡例

第Ⅰ章　序章……1
　第１節　土気城跡と周辺の遺跡……1
　第２節　調査の経緯と方法……3
　第３節　調査概要……4
第Ⅱ章　遺構と遺物……4
　第１節　竪穴住居跡……4
　第２節　掘立柱建物跡……6
　第３節　地下式壙……9
　第４節　井戸……9
　第５節　土壙及びピット群……12
　第６節　溝状遺構……13
　第７節　調査区出土遺物……14
第Ⅲ章　小結……14

挿図目次

第１図　周辺主要遺跡分布図……1
第２図　土気城跡概念図……2
第３図　遺構配置図……3
第４図　第１～３号竪穴住居跡、遺物実測図……5
第５図　第４号竪穴住居跡、遺物実測図……6
第６図　第１・２・４号掘立柱建物跡実測図……7
第７図　第３・５号掘立柱建物跡実測図……8
第８図　第１号地下式壙、第１・２号井戸、
　　第１・２号土壙、遺物実測図……10
第９図　第３～６号土壙、遺物実測図……11
第10図　第１号溝状遺構、遺物実測図……13
第11図　調査区出土遺物実測図……14

表　目　次

第１表　第１号住居跡遺物観察表……4
第２表　第４号住居跡遺物観察表……6
第３表　第１号井戸遺物観察表……9
第４表　第２号土壙遺物観察表……11
第５表　第３号土壙遺物観察表……12
第６表　第４号土壙遺物観察表……12
第７表　第６号土壙遺物観察表……13
第８表　第１号溝状遺構遺物観察表……13

図版目次

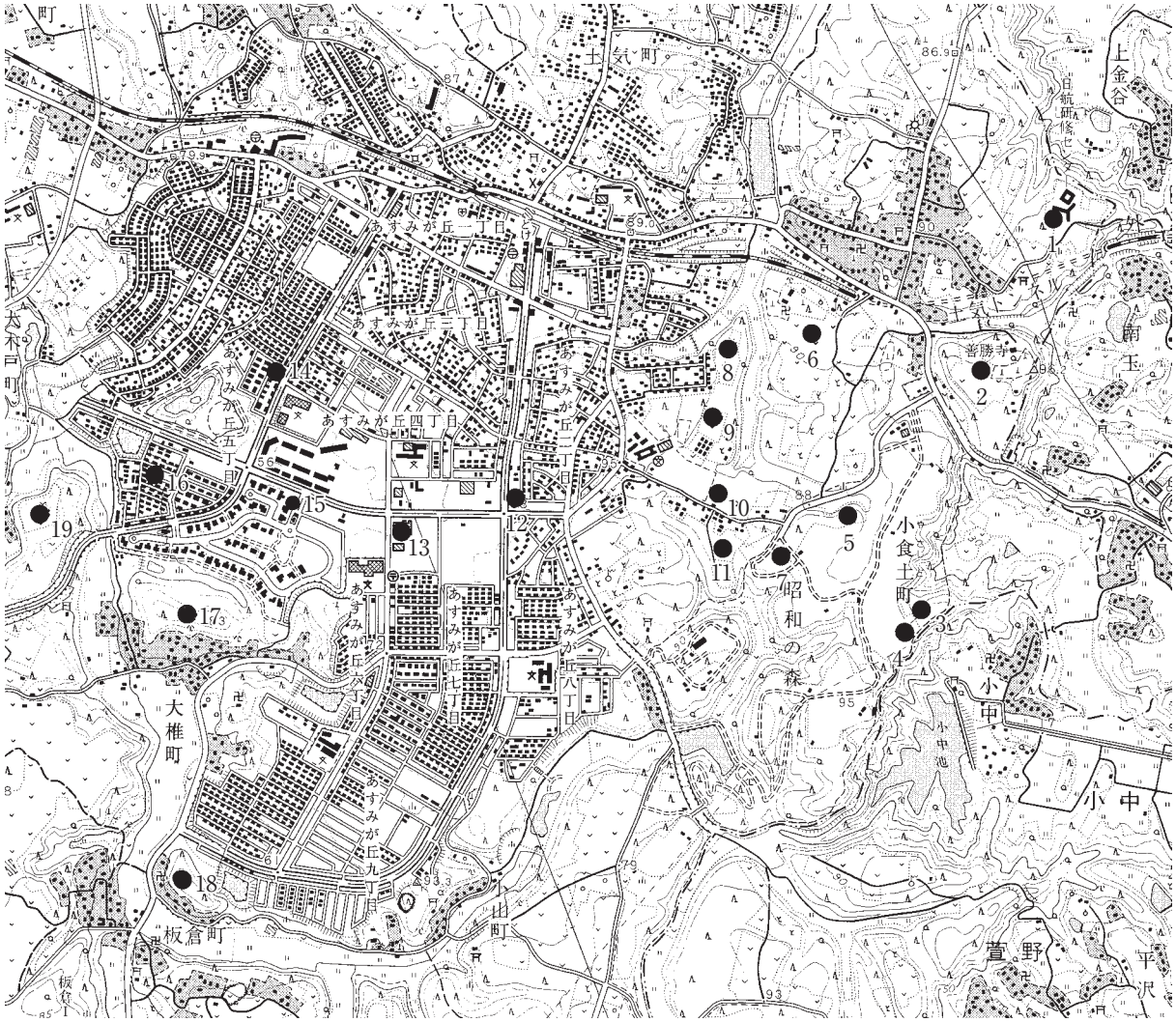
図版１　調査遠景、第１～３号竪穴住居跡完掘（西から）、第１～３号竪穴住居跡完掘（南から）、第１号竪穴住居跡竈、第１号竪穴住居跡（北から）、第４号竪穴住居跡・第２号井戸・第２号土壙、第４号竪穴住居跡、 第１号掘立柱建物跡
図版２　第１号掘立柱建物跡、第２・４号掘立柱建物跡、第５号掘立柱建物跡、第１号溝状遺構、ピット群⑴、ピット群⑵、第１号井戸、第１号土壙
図版３　第２号土壙、第３号土壙、第３号土壙遺物出土状況、第４号土壙、第５号土壙、第６号土壙、第６号土壙遺物出土状況⑴、第６号土壙遺物出土状況⑵
図版４　遺構および調査区出土遺物

第Ⅰ章　序　章

第１節　土気城跡と周辺の遺跡（第１・２図）

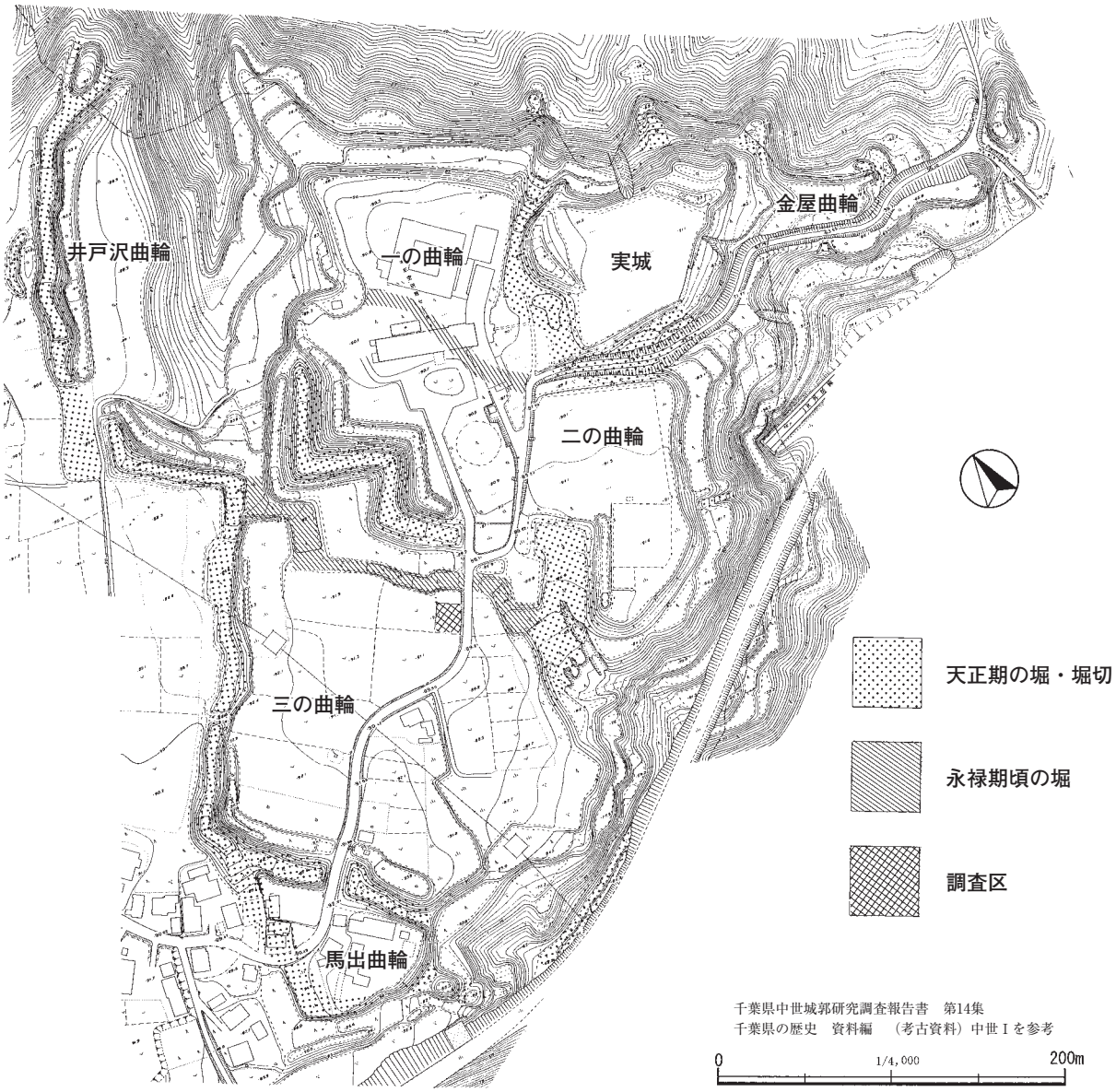
千葉市は房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。土気地区は千葉市の北東端にあり、行政上で大網白里町と接する。地形的には昭和の森が所在する辺りで最も標高が高い地域となり、土気と大網との境で本納－東金崖線と呼ばれる急崖を形成し、地形の上から見ると、標高90m前後の平坦な台地が展開する一方、東側の九十九里方面とも比高差40m程の急崖で明瞭に分けられる。

土気城跡はこの急崖を利用して築かれた城で、西側は鹿島川水系のなす浅い谷が南北に走り、自然の障壁を形成する。本城跡は戦国酒井氏の居城であり、築城は不明だが、廃城は天正18年とする説が有力である。その構造は第２図に見る通り、発達した縄張りを持ち、実城・金谷曲輪・二の曲輪・三の曲輪・馬出曲輪・井戸沢曲輪よりなり、面積は約115,000㎡に及ぶものとされる。今回の調査区は、三の曲輪の東側堀と二の曲輪に続く土橋の西側付近の一部にあたる。



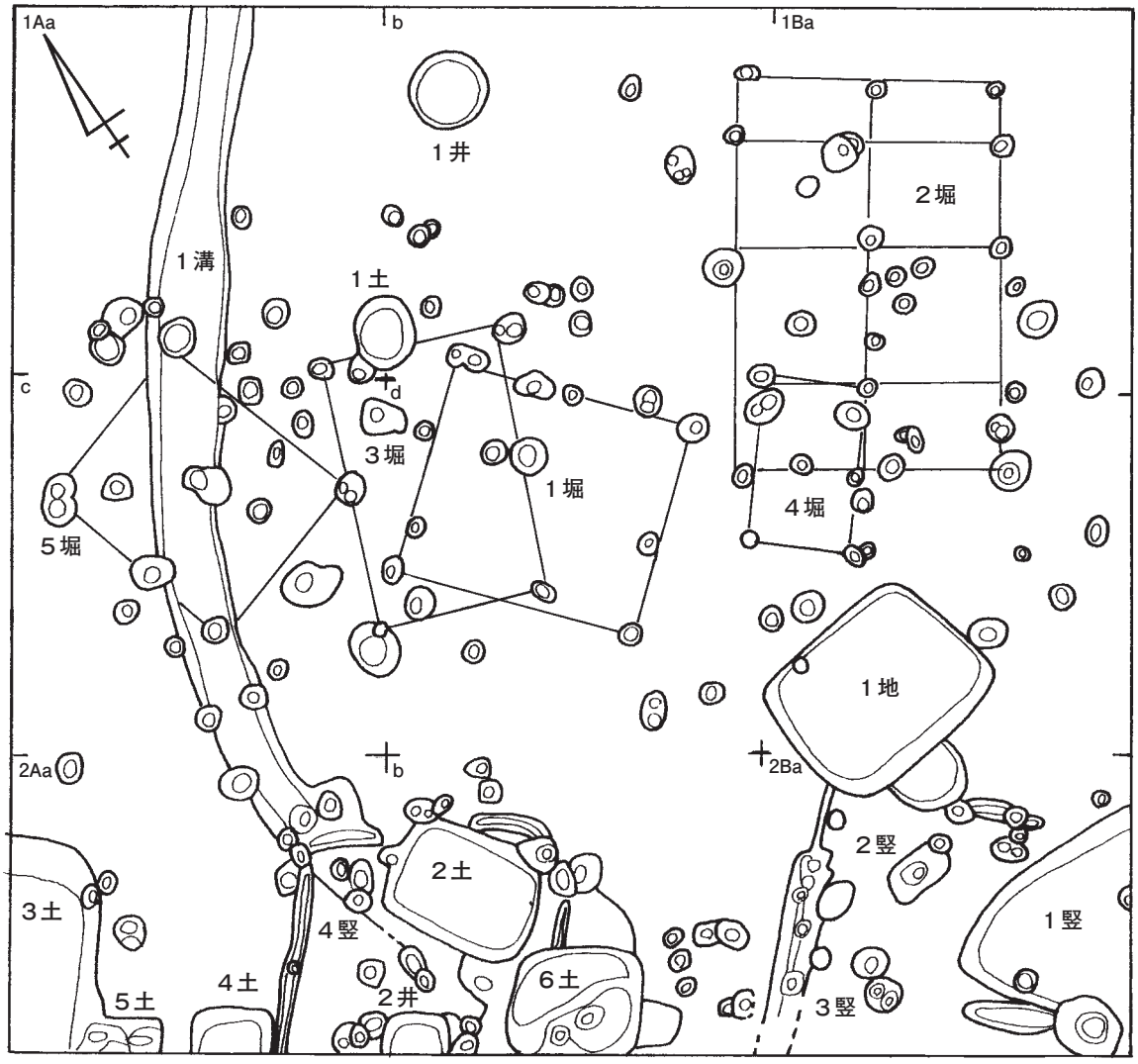
１．土気城跡　２．土気中台遺跡　３．辰ヶ台城跡　４．辰ヶ台遺跡　５．小食土廃寺　６．黒ハギ遺跡
７．荻生道遺跡　８．奥房台遺跡　９．五十石遺跡　10．長塚遺跡　11．上塚遺跡　12．南河原坂窯跡群
13．坂ノ越遺跡　14．大谷城跡　15．後台城跡　16．御堂崎城跡　17．大椎城跡　18．向城跡　19．立山城跡

第１図　周辺主要遺跡分布図（国土地理院発行１：25,000　東金）



第２図　土気城跡概念図

この地域は、多くの遺跡の所在が知られる市内でも有数の遺跡の密集地域である。その内、今回の調査に関連する奈良・平安時代から中世にかけての主要な遺跡として、遺跡北西側地域に点在する奈良・平安時代の集落や墓域等が検出された黒ハギ遺跡・上塚遺跡・長塚遺跡・荻生道遺跡・奥房台遺跡、寺院跡の小食土廃寺、窯業遺跡である南河原坂窯跡群・坂ノ越遺跡などがあげられる。中世城郭に関係する遺跡としては、土気中台遺跡・辰ヶ台城跡・大谷城跡・御堂崎城跡・後台城跡・立山城跡・大椎城跡がある。このうち、立山城跡は本遺跡から西南西に約3.6㎞の地点にあり、中世の堀が２条検出されている。大椎城跡は南西約3.3㎞の地点にあり、郭、腰曲輪、土塁、土橋、空堀があり、中世戦国期の所産と考えられる。大谷城跡は西約2.7㎞の地点にあり、㈶千葉市文化財調査協会により各曲輪をトレンチ調査した。この結果、中世遺物として陶器片・小柄・唐銭等が確認され、16世紀の普請途上の城と推測されている。



竪　竪穴住居跡　　堀　堀立柱建物跡　　地　地下式壙
土　土壙　　井　井戸　　溝　溝状遺構

0　1/100　5m

第３図　遺構配置図

第２節　調査の経緯と方法（第３図）

今回の調査は、調査対象面積212.90㎡を対象に平成19年７月２日から同年７月23日にかけて当財団が実施した。

調査に際し、実測・遺物の取り上げなどの測量を行う上で必要な座標点については事業地の敷地の形状にあわせて、10m方眼のグリッドを設定し、北西から南東にアルファベット、北東から南西に算用数字で名称を付けた。この10mグリットの中を４区分し、小グリットを設定した。調査で使用したグリッドは公定座標と比べN-35°-Eに振れていた。調査は重機で調査範囲全体を遺構確認面まで掘り下げた後実施した。

第３節　調査概要（第３図）

本遺跡は、過去４回調査されている。昭和54年には日本航空研修センター建設に先立ち、川戸彰氏が面積524㎡を対象に調査し、奈良・平安時代の竪穴住居跡・戦国時代の墓壙等が検出されている。昭和62年には千葉市教育委員会が東京電力による送電鉄塔工事建設に先立ち、三の曲輪内で調査を行い、また、同年日本航空研修センター増設部分で400㎡の調査も実施した。平成４年には㈶千葉市文化財調査協会が日本航空研修センター建て替え部分で調査を実施し、9,112.68㎡の内、604㎡を対象とするものであった。平成５年には㈶千葉県文化財センターによって、中近世城跡研究調査事業の一環として本遺跡の測量調査が実施された。

今回の調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡４軒と溝状遺構１条、中世と考えられる堀立柱建物跡５棟・地下式壙１基・井戸２基・土壙６基・90基を越えるピットが検出された。遺構内と調査区内から奈良～中世の建物と若干の縄文時代の遺物が検出された。

遺跡の基本層序は、第Ⅰ層：表土（耕作土）、第Ⅱ層：褐色土、第Ⅲ層：暗褐色土である。

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第４図・図版１・４）

調査区南よりの２B-aグリッドに位置する。第２・３号竪穴住居跡と重なり、これらを切る。また、東側が道路建設時に撹乱を受ける。また、南西側が撹乱によって壊される。主軸方位はN-０°で、規模は計測不能。壁は深さ0.10mでほぼ垂直に立ち上がる。柱穴等は道路の撹乱により検出されなかった。床面はハードローム層を利用し、一部貼り床をしている。周溝は確認されなかった。

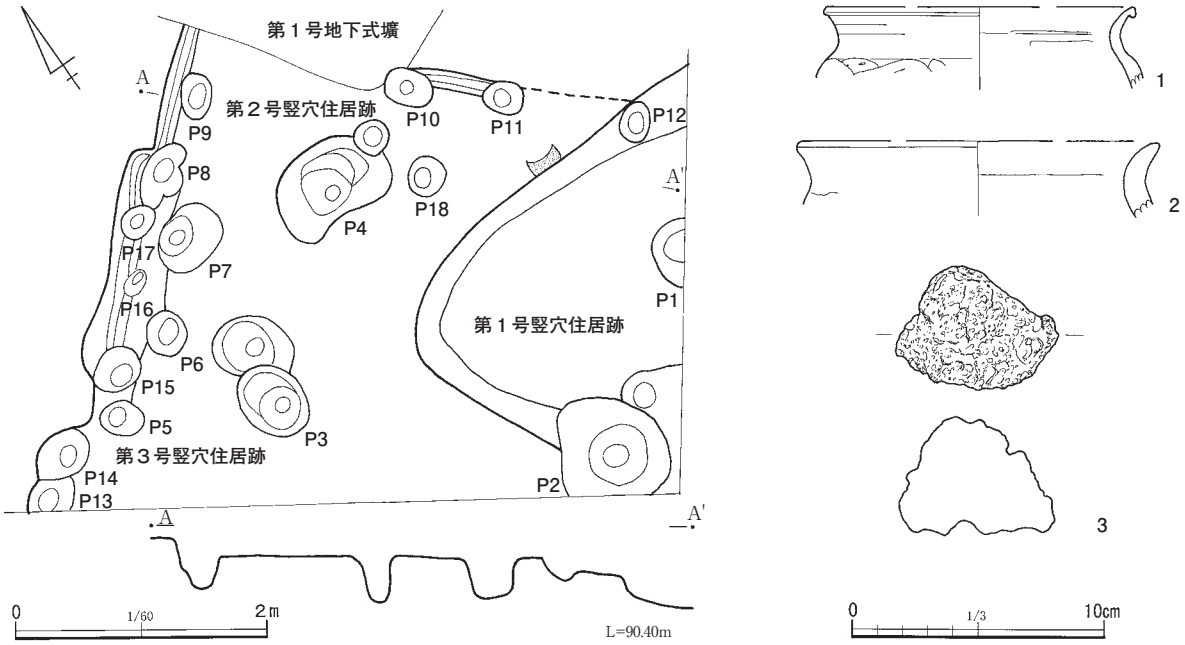
明確な竈は検出されなかったものの、竪穴の北寄りの壁外に浅い焼土堆積が認められた。竈の煙道が残ったものかもしれない。遺物は甕２点、鉄滓１点が出土した。

第１表　第１号住居跡遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　考
		口径	底径	器高					
1	甕	12.2	—	3.3	良好	2.5YR4/6 赤褐色	細砂粒少	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラ削リ、胴部内面ナデ	口縁部1/6残
2	甕	14.4	—	3.1	良好	5YR5/6 明赤褐色	雲母含む	口縁部ヨコナデ、胴部外面削リ、胴部内面ナデ	口縁部1/8残
番号	種　類	長（cm）	幅	厚さ	重量（g）	備　考			
3	鉄　滓	5.8	4.5	4.2	93				

第２号竪穴住居跡（第４図・図版１）

調査区南東よりの２B-aグリッドに位置する。第１・３号竪穴住居跡と重なり、第１号竪穴住居跡に切られ、第３号竪穴住居跡を切る。主軸方位はN-51°-Eで、規模は南東側が撹乱によって壊され、北側の一部が地下式壙で壊されるため、規模は計測出来なかった。壁は深さ0.32mでやや開くように立ち上がる。主な主柱穴は４本（P1～P4）と考えられるが、同一箇所に２本ないしは３本が重複した状態で検出されたため、建て替えが想定される。主柱穴は径56～100cm・深さ54～66cmで、柱間寸法は1.60～2.20mを測る。本住居に伴う支柱穴は８本（P5～P12）確認され、径30cm前後・深さ36～56cm



第４図　第１～３号竪穴住居跡、遺物実測図

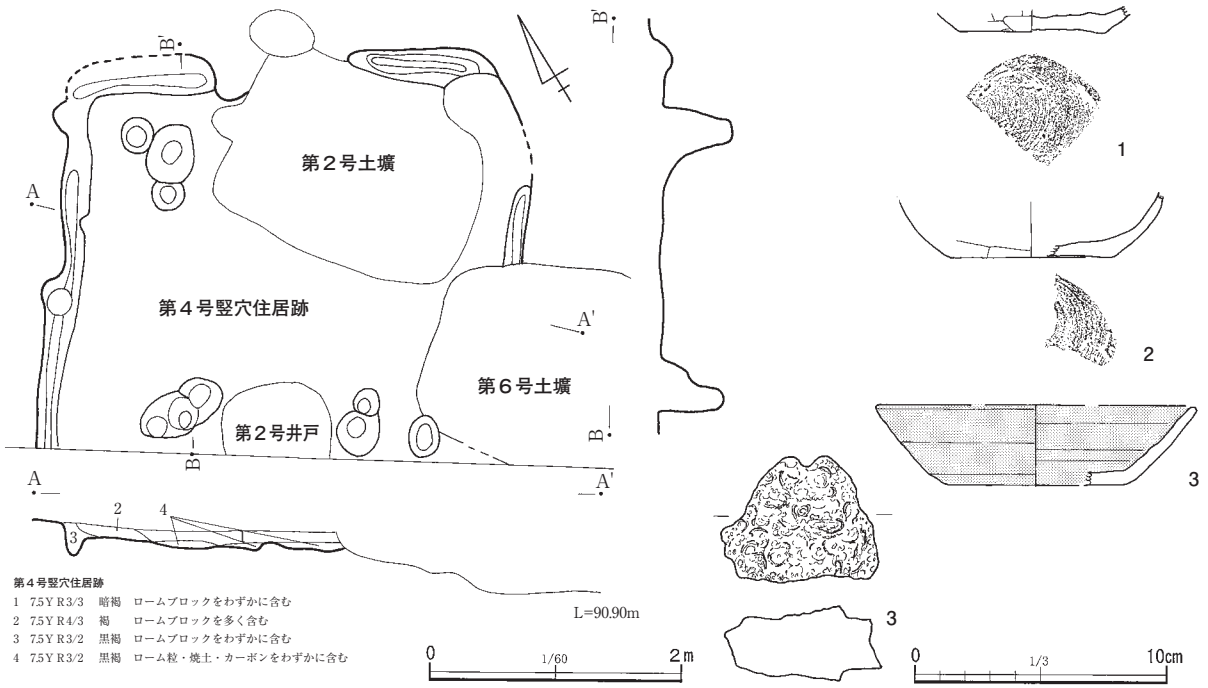
でいずれも壁沿いに巡る。床面はロームブロックを利用した貼り床である。周溝は幅14～16cm、深さ４～26cmで、全周するものと推定される。竈は検出されなかった。

第３号竪穴住居跡（第４図・図版１）

調査区南よりの２B-aグリッドに位置する。第１・２号竪穴住居跡と重なり、第２号竪穴住居跡に切られる。確認壁の方位はN-54°-Eで、北西側の周溝部分だけが検出された。規模は計測出来なかった。壁は深さ0.28mでやや開くように立ち上がる。本住居に伴う支柱穴は６本（P13～P18）確認され、径23～30cm・深さ約40cmでいずれも壁沿いに巡る。周溝は幅15～20cm、深さ12～26cmを確認した。竈は検出されなかった。

第４号竪穴住居跡（第５図・図版１・４）

調査区南西よりの２A-a・bグリッドに位置する。第２号井戸、第２・６号土壙、第１号溝状遺構と重なり、第１号溝を切り、第２号井戸、第２・６号土壙に切られる。主軸方位はN-46°-Eで、規模は撹乱の少ない北側で計測すると東西3.60mを測る。壁は深さ0.23mでやや開くように立ち上がる。主な主柱穴は４本と考えられるが、同一箇所に複数の柱が検出されたため、建て替えが想定される。主柱穴は径23～32cm・深さ22～53cmで、柱間寸法は2.0～2.1mを測る。本住居に伴う支柱穴は確認されていない。床面はロームブロックを利用した貼り床が一部に認められる。周溝は幅14～22cm、深さ12cm前後で、全周するものと推定される。第２号土壙に切られ、竈は検出されなかった。遺物は坏片３点・鉄滓１点が出土した。



第５図　第４号竪穴住居跡・遺物実測図

第２表　第４号住居跡遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　考
		口径	底径	器高					
1	坏	—	5.8	1.1	良好	2.5YR4/6 赤褐色	細砂粒少	底部回転糸切り	底部1/3残
2	坏	10.4	—	2.6	良好	5YR5/6 明黄褐色	細砂粒少	口縁部ヨコナデ、外面底部付近ヘラ削り、底部回転糸切り	底部1/6残
3	坏	12.8	7.0	3.2	良好	10YR6/4 にぶい黄橙色	赤色粒含む	底部ヘラ削り?	口縁部1/6残 赤彩
番号	種　類	長（cm）	幅	厚さ	重量（g）	備　考			
4	鉄　滓	5.8	4.5	4.2	93				

第２節　掘立柱建物跡

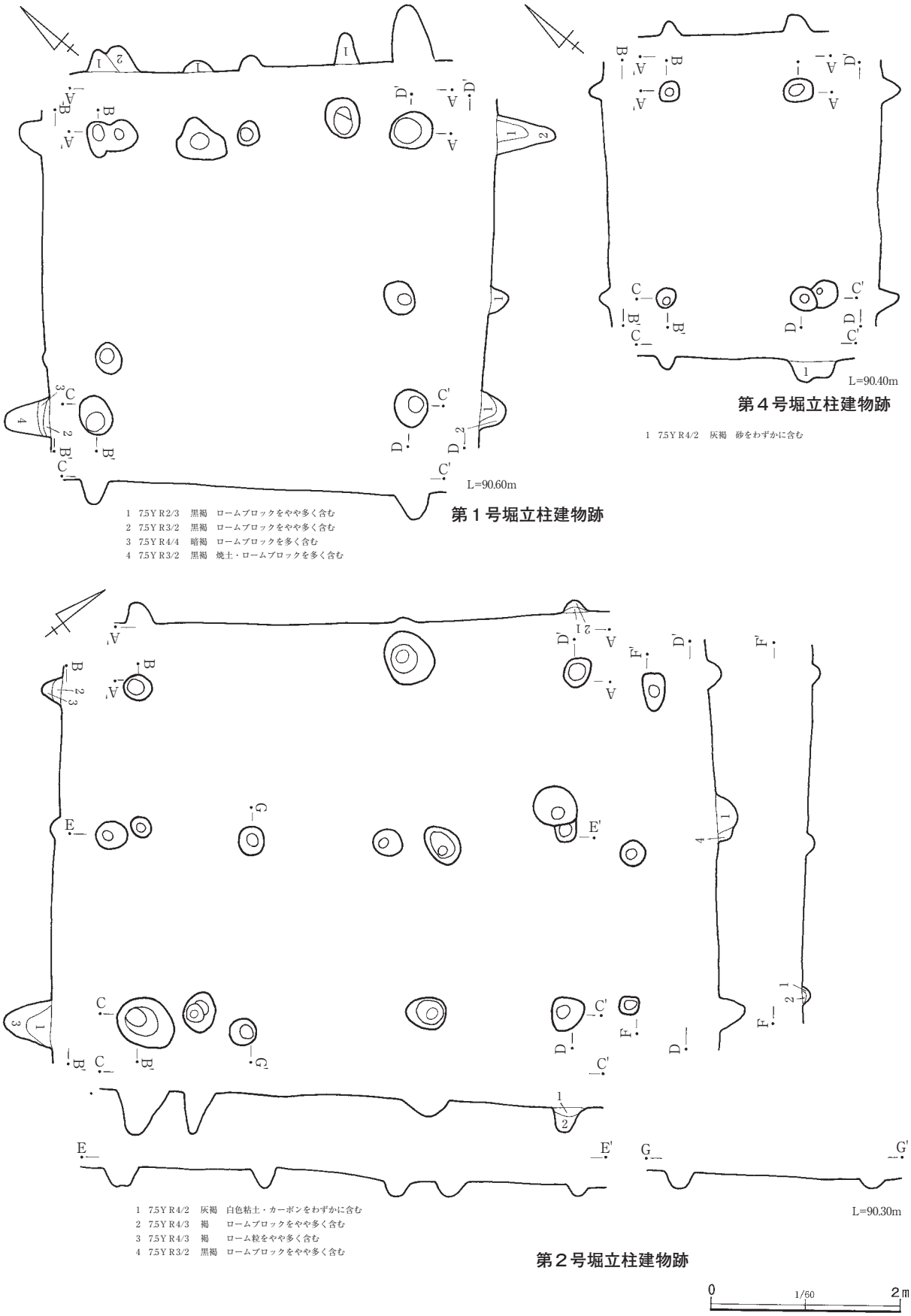
調査区のほぼ全域から掘立柱建物跡に伴うと考えられる大・小のピットが検出された。中には柱痕跡が明らかである物も含まれており、数棟あったと推測される。柱穴の並びが明らかな５棟が確認でき、他についてはピット群とした。

第１号掘立柱建物跡（第６図・図版１・２）

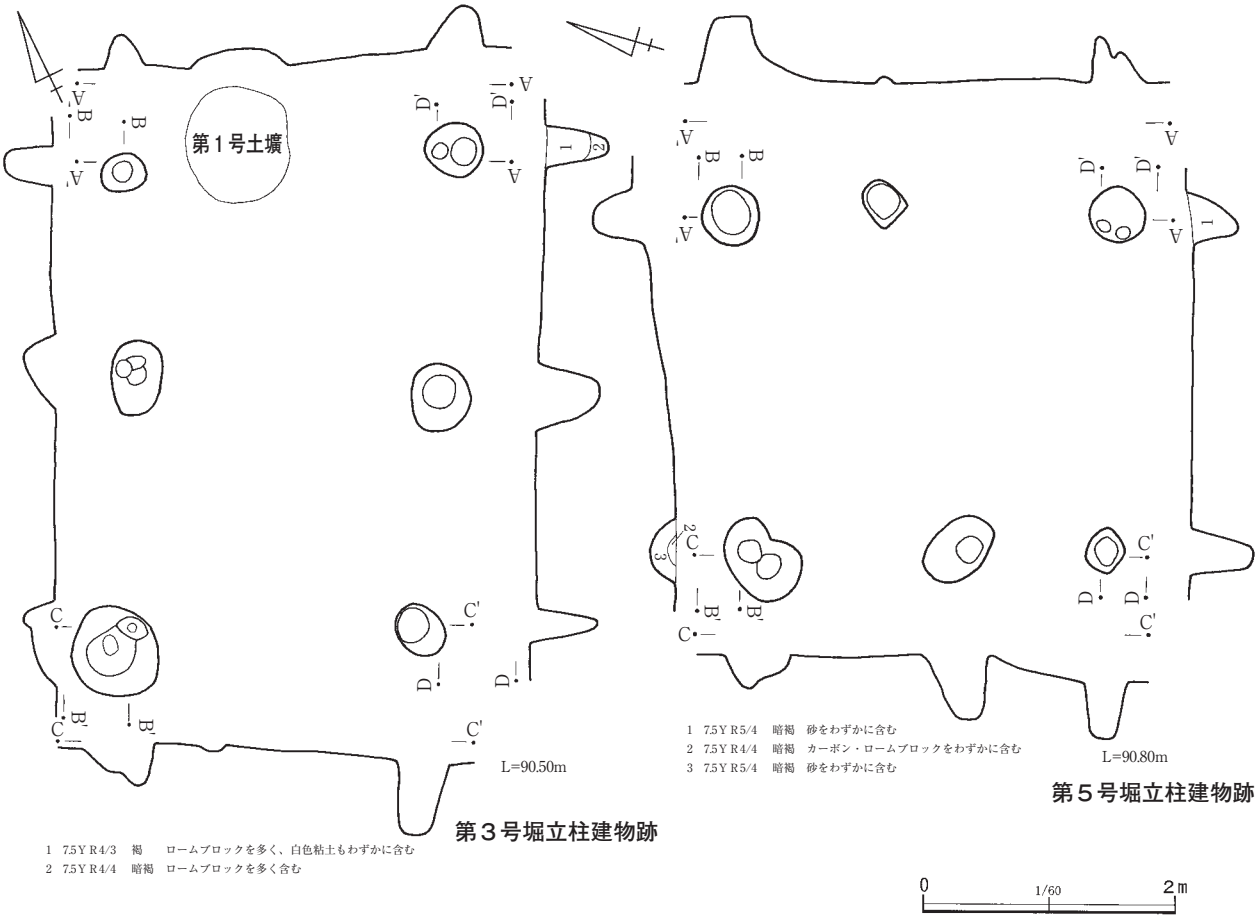
１A-b・dグリッド、調査区の中央から検出された。第３号掘立柱建物跡と重なり、東側に第２・４号掘立柱建物跡が隣接する。構造は梁行２間×桁行２間で、主軸方位をN-40°-Wにとる北西から南東に長い長方形の側柱建物である。規模は梁行2.88m、桁行3.25mを測り、柱筋により柱穴数にばらつきがある。柱穴は径40～56㎝ 、確認面からの深さは28～58㎝、隅の柱穴のほうが間柱よりも深い。柱穴に柱痕跡が複数認められ、立て替えが想定される。

第２号掘立柱建物跡（第６図・図版２）

１B-aグリッド、調査区の東よりで検出された。西側に第１号掘立柱建物跡と隣接し、第４号掘立



第６図　第１・２・４号堀立柱建物跡実測図



第７図　第３・５号堀立柱建物跡実測図

柱建物跡と重なる。構造は梁行２間×桁行４間で、主軸方位をN-34°-Eにとる長方形の側柱建物である。規模は梁行3.80m、桁行4.80m、柱間寸法は梁行1.40～2.10m、桁行1.30～2.80mを測る。柱穴は径20～60㎝、確認面からの深さは10～50㎝、北西側の柱穴がやや浅い、北東側の柱３本は庇の可能性もある。

第３号掘立柱建物跡（第７図）

１A-ａ～ｄグリッド、調査区の中央から検出された。ピット群の一部を柱の組み合わせから掘立柱建物跡とした。周囲にはまだ大・小のピットがあり、第１号掘立柱建物跡と重なる。構造は梁行１間×桁行２間で、主軸方位をN-23°-Eにとる長方形の側柱建物。規模は梁行2.50m、桁行3.90mを測る。柱間寸法は梁行1.60～2.10m、桁行2.50～2.70m、径45～75cm、確認面からの深さは23～36cmである。一部の柱穴が第５号掘立柱建物跡と重複する。

第４号掘立柱建物跡（第６図・図版２）

１B-ｃグリッド、調査区の中央寄りから検出された。西側に第１号掘立柱建物跡と隣接し、第２号掘立柱建物跡と重なる。構造は梁行１間×桁行１間で、主軸方位をN-45°-Eにとる長方形の側柱建物。規模は梁行1.35m、桁行2.15mを測る。柱間寸法は梁行1.35m、桁行2.15m、径21～31cm、確認面からの深さは20～90cmである。北東側の柱穴が第２号掘立柱建物跡と重複する。

第５号掘立柱建物跡（第７図・図版２）

１A-ｃグリッド、調査区の西側から検出された。南東側で第３号掘立柱建物跡と重なる。構造は梁

行１間×桁行２間で、主軸方位をN-15°-Wにとる長方形の側柱建物。周囲には他にも大・小のピットがある。規模は梁行2.70m、桁行2.90mを測る。柱間寸法は梁行2.70m、桁行1.10～1.80m、径40～90cm、確認面からの深さは32～65cmである。南東コーナーの柱穴が第３号掘立柱建物跡と重複する。

第３節　地下式壙

第１号地下式壙（第８図）

１Ｂ-ｃグリッド、主室は長方形で、主軸方位をN-４°-Wにとる。規模は短軸長2.10m、長軸長2.70m、深さ1.90m、縦抗は半円形で、幅0.98m、深さ0.85mを測る。天井部は崩落していた。特に遺物の出土は無く時期の特定はできなかった。

第４節　井戸

第１号井戸（第８図・図版２・４）

１A-bグリッド、円形で、上面の規模は径0.94～0.97m、下面は0.84～0.86m、確認面から深さ2.68mまで確認した。覆土中からはかわらけ、砥石、角釘等が出土している。中世以降の井戸と考えられる。

第３表　第１号井戸遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　　考
		口径	底径	器高					
1	かわらけ	10.5	5.6	2.7	良好	7.5YR6/5 明黄褐色	砂粒少	底部糸切り、体部内外面ナデ	1/3残
番号	種　類	長（cm）	幅	厚さ	重量（g）	材　　質	備　　考		
2	砥　石	6.0	3.4	2.5	53	砂　岩			
3	角　釘	5.5	0.5	0.5	4				

第２号井戸（第８図・図版３）

２A-bグリッド、第４号竪穴住居跡の中央部で重複し、これを切る。南側が調査区域外に伸びるため全体の形状は不明だが、確認された部分から円形を呈すると想定される。上面の規模は径0.85m、下面は0.73m、確認面からの深さは約２ｍまで確認した。時期を特定するような遺物の出土は無いが、覆土の状態等から中世以降の井戸と考えられる。

第５節　土壙およびピット群

第１号土壙（第８図・図版２）

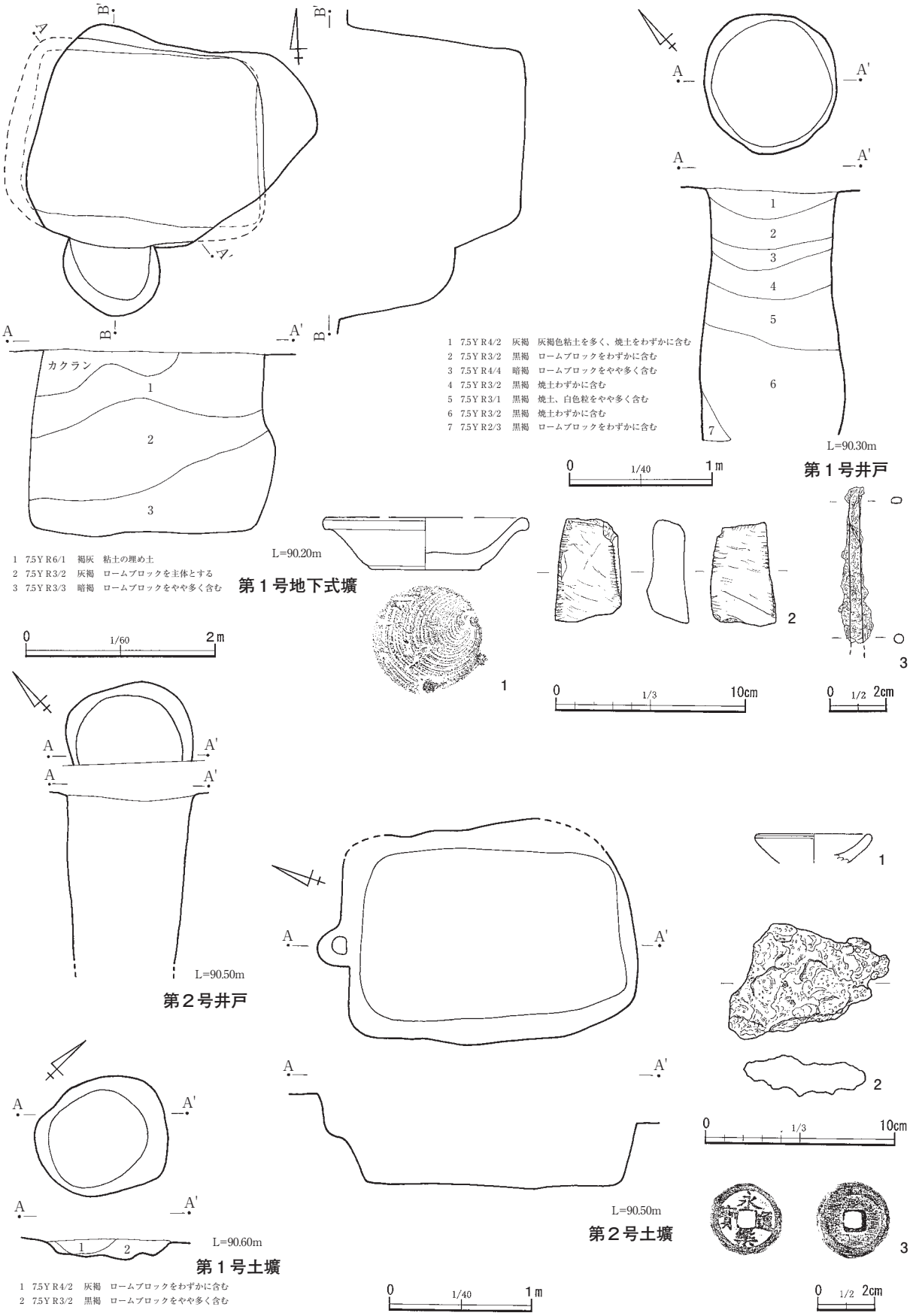
１A-a・bグリッド、調査区中央北寄り、第３号掘立柱建物跡の北東側で接する。円形で、上面の規模は径0.80～0.84m、下面は0.65～0.70m、確認面からの深さは0.15mである。遺物の出土は無い。

第２号土壙（第８図・図版３・４）

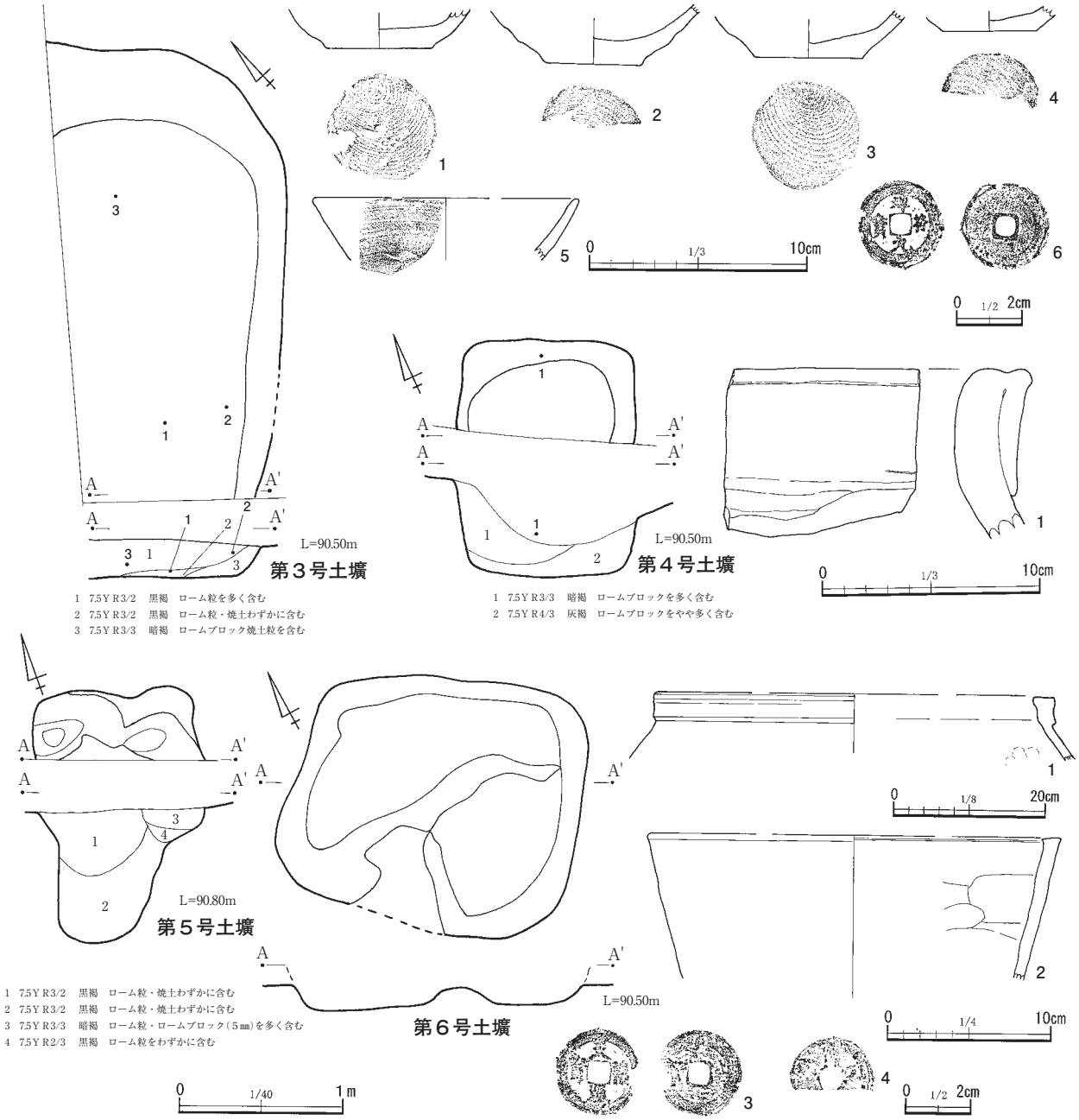
２A-bグリッド、調査区南西側中央寄り、第４号竪穴住居跡の北東側で重なり住居跡を切る、長方形で、上面の規模は長軸長2.00～2.27m、短軸長1.42～1.56m、確認面からの深さは0.48～0.63mである。覆土中からはかわらけ・永楽銭・鉄滓が出土している。出土遺物等より中世頃の遺構と考えられる。

第４表　第２号土壙遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　　考
		口径	底径	器高					
1	かわらけ	5.8	3.9	1.5	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒少		全体1/6残
番号	種　類	長（cm）	幅	厚さ	重量（g）	備　　考			
2	鉄　滓	7.4	5.4	1.8	93	椀状滓			



第８図　第１号地下式壙、第１・２号井戸、第１・２号土壙、遺物実測図



第９図　第３～６号土壙、遺物実測図

第３号土壙（第９図・図版３・４）

２A-aグリッド、調査区南西端、第５号土壙に接する。北西側及び南西側が調査区域外に伸びるため遺構の一部を調査した。形状は隅丸方形と推測され、調査部分の規模は北東－南西で2.7m・下面2.34m、北西－南東で上面1.4m・下面1.17m、確認面からの深さ0.26mを測る。覆土中からは、かわらけ、祥符元宝等が出土している。

第５表　第３号土壙遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　　考
		口径	底径	器高					
1	かわらけ	—	4.8	1.8	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒少	底部糸切り	底部残
2	かわらけ	—	4.7	2.8	良好	7.5YR7/6 橙色	砂粒少	底部糸切り	底部残
3	かわらけ	—	4.9	1.9	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒少	底部糸切り	底部残
4	かわらけ	—	4.9	0.7	良好	2.5YR6/8 橙色	砂粒少	底部糸切り	底部残
5	かわらけ	12.2	—	6.2	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒少	口縁部ヨコナデ	口縁部1/4残

第４号土壙（第９図・図版３・４）

２A-aグリッド、調査区西端、南西側が調査区域外に伸びる。確認部分は半分の隅丸方形で、規模は上面で幅1.10m、下面で0.90m、深さ0.56mを測る。覆土中から常滑甕、坏が出土している。出土遺物等から中世の時期と考えられる。

第６表　第４号土壙遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　　考
		口径	底径	器高					
1	常　滑　甕	—	—	7.4	良好	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒多		口縁部

第５号土壙（第９図・図版３）

２A-aグリッド、調査区西端、北西側で第３号土壙と接する。南西側が調査区域外に伸びるため全体の形状は不明だが、不整形と思われる。確認部分の規模は上面で幅1.00m、下面で幅0.48m、深さ0.83mを測る。遺構の明確な時期については不明である。

第６号土壙（第９図・図版３・４）

２A-bグリッド、調査区南西端中央、第４号竪穴住居跡の南側で重なりこれを切る。全体に撹乱を受け、南西側の一部が調査区域外に伸びる。確認された部分から隅丸方形を呈すると思われる。規模は上面の長軸で1.75m、短軸で1.55m、下面の長軸で1.50m、短軸で1.30m、深さ0.40mを測る。覆土中からは常滑の口縁部片１点・鉢１点・天聖通宝１点及び解読不明な銭１点が出土している。

第７表　第６号土壙遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　　考
		口径	底径	器高					
1	常　滑　甕	49.2	—	7.9	良好	7.5YR7/6 橙色	砂粒少		口縁付近1/6残
2	鉢	25.4	—	8.8	良好	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂粒少	口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ	口縁付近1/6残煤残

ピット群（第３図・図版２）

調査区内のほぼ全域で90基のピットを確認した。掘立柱建物跡を検出した調査区中央部で若干の集中部分が認められる。ピットの規模は上面径は0.20m～0.80m、底面径は0.10m～0.50m、深さ0.20m～0.64mの平面形が円形ないしは楕円形のものが主体的であるが、方形を呈するものも確認できた。これらのものの多くには柱痕跡らしい断面及び圧着痕が認められ、掘立柱建物跡等の建物遺構の一部であったと考えられる。ピット内からの時期を特定できるような遺物の出土は無いが、他の遺構との切り合い関係などから中世時期以降のものと考えられる。

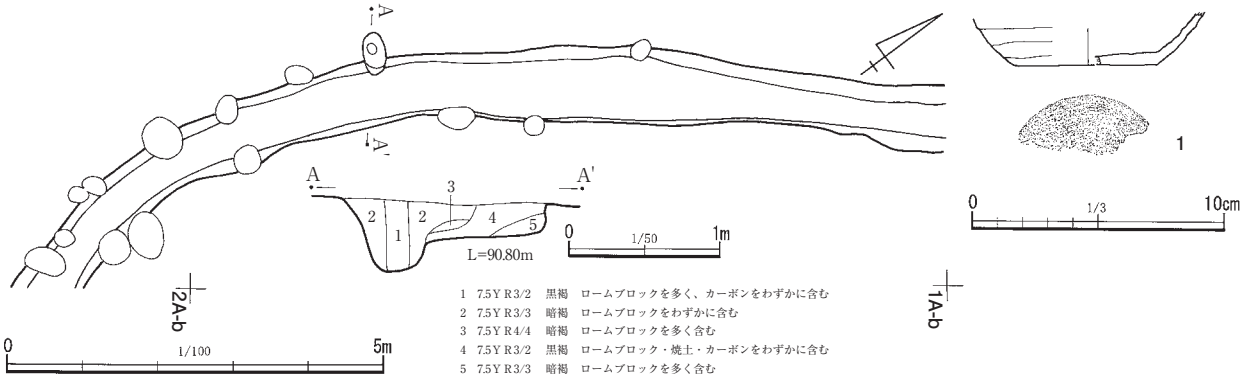
第６節　溝状遺構

第１号溝状遺構（第10図・図版２）

１Ａ－ａ・ｃ・２Ａ－ａにかけて弓なりに湾曲して調査区を縦断するように検出された。北側の一部は耕作時の攪乱を受け、南側端は第４号竪穴住居跡と第２号土壙に切られている。この溝状遺構は南東側の第１号竪穴住居跡南側方向に延びていたものと思われる。溝幅は北東端で0.80m、南西側で0.80m、最大幅1.00m、最も深い部分で約0.30mを測る。遺構の中央付近で第５号掘立柱建物跡の柱穴によって切られる。遺構からは奈良・平安時代の土師器坏が出土している遺構の時期については、掘立柱建物跡・ピット群・土壙などに切られていることから、中世以前の時期が想定される。

第８表　第１号溝状遺構遺物観察表

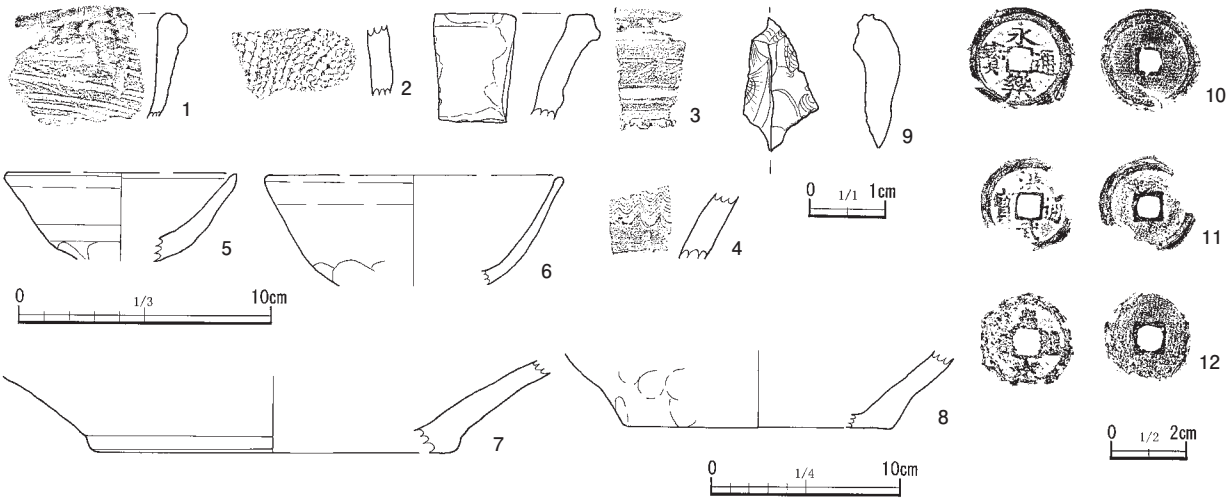
番号	器　種	法量（cm）			焼　成	色　調	胎　土	手　法　の　特　徴	備　考
		口径	底径	器高					
1	坏	—	5.6	2.1	良好	7.5YR8/2 灰白色	砂粒少	底部回転ヘラ削り	底部1/3残



第10図　第１号溝状遺構、遺物実測図

第７節　調査区出土遺物（第11図・図版４）

今回の調査区では、遺構確認面の直上層がほとんど表土層（耕作土）であったため、出土遺物は表土層と遺構内から出土している。全体的に出土量は少ない。



第11図　調査区出土遺物実測図

出土遺物（第11図）は、１・２が縄文時代土器片で１は後期の口縁部片で、２はＲＬの単節縄文を施す胴部片で、９は黒曜石の剥片である。３・４は古墳時代須恵器片で、３は口縁部、４は口縁部付近の破片で共に櫛描文を持つ。５・６は平安時代の土師器坏片。７・８は中世の常滑甕底部片。10は永楽通宝、11は洪武通宝で、12は聖宋元宝か。

第Ⅲ章　小　結

調査で検出した遺構から、調査区部分が奈良・平安時代の時期には集落跡の一部であったことが竪穴住居跡の検出により明らかとなり、過去の調査成果から広い範囲で集落が展開していたものと考えられる。また中世頃の時期については、掘立柱建物跡や地下式壙・井戸・土壙が造られた場所であり、土気城に関連する遺構群であったことが推測され、第２図に示す通り土気城跡の三の曲輪の内でも居住域であった事が窺える。

しかしながら、今回の調査は土気城跡の三の曲輪の一部についてに過ぎず、まだまだ残された課題は大きい。

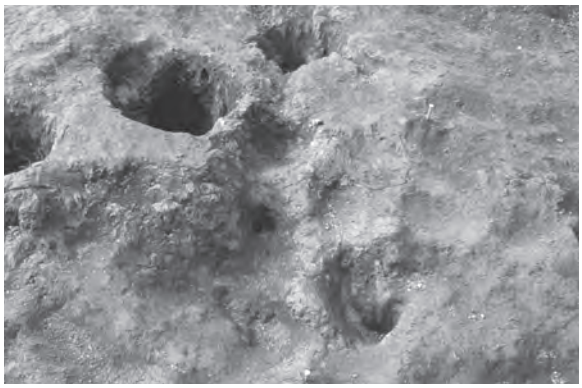
参考文献

１、小高春男　土気城跡　１９９４　千葉県中近世城跡調査研究報告　第14集　㈶千葉県文化財センター
２、小高春男　土気城跡　１９９４　千葉県の歴史資料編　考古３　㈶千葉県資料研究財団
３、簗瀬裕一　土気城跡　２００２　房総の城郭　千葉城郭研究会編

調査遠景

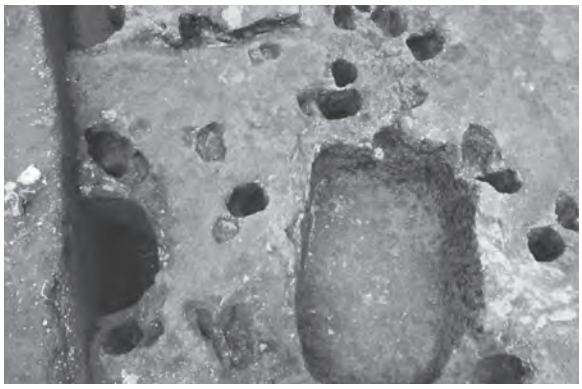
第１～３号竪穴住居跡完堀（西から）

第１～３号竪穴住居跡完堀（南から）

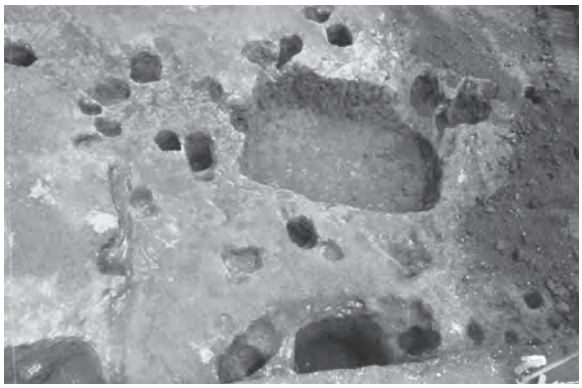


第１号竪穴住居跡竈

第１号竪穴住居跡（北から）



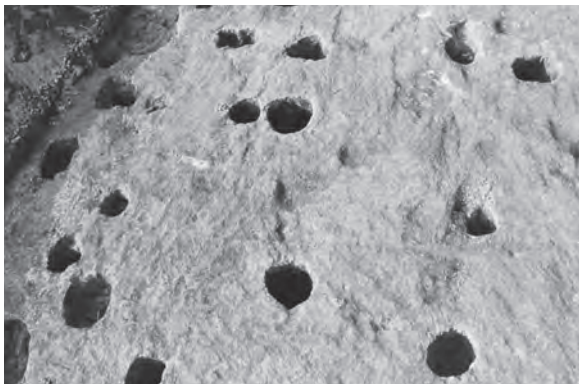
第４号竪穴住居跡・第２号井戸・第２号土壙



第４号竪穴住居跡

第１号堀立柱建物跡

図版２



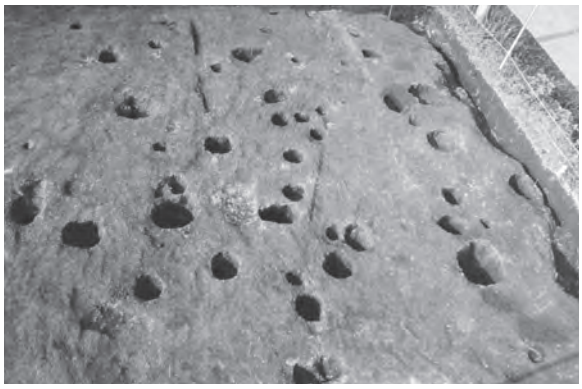
第１号堀立柱建物跡

第２・４号堀立柱建物跡

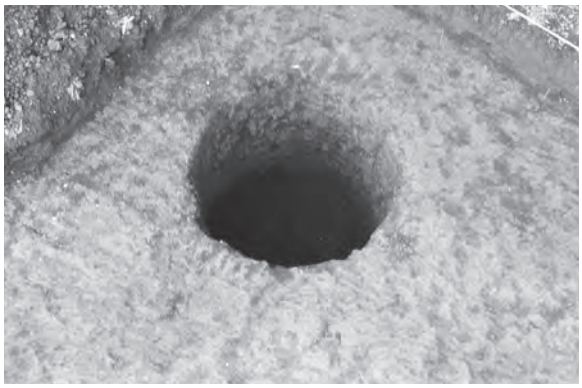
第５号堀立柱建物跡

第１号溝状遺構

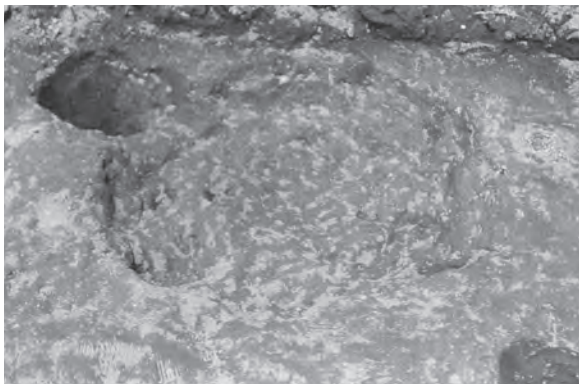
ピット群（1）



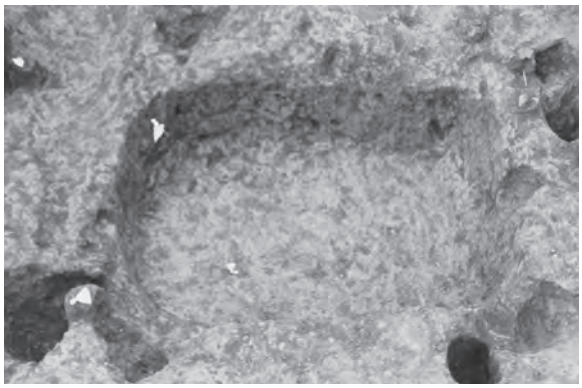
ピット群（2）



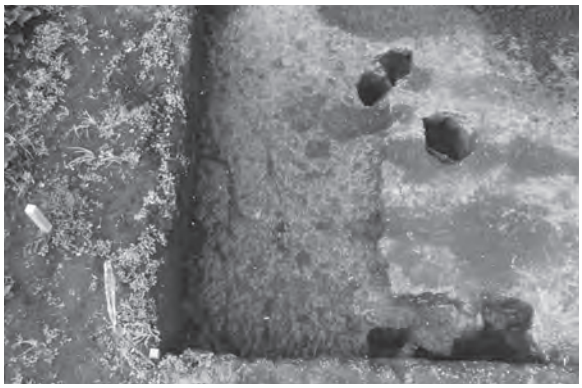
第１号井戸



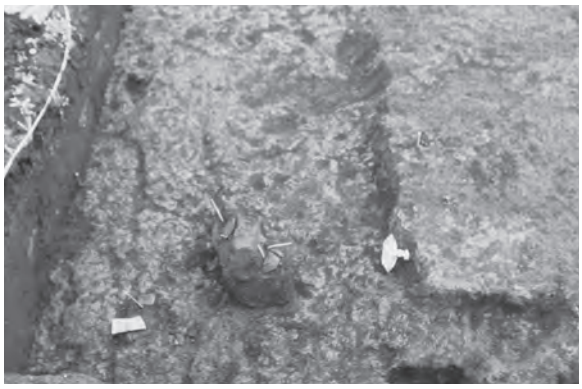
第１号土壙



第２号土壙



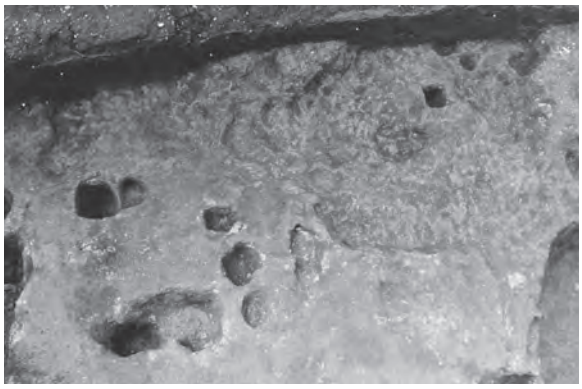
第３号土壙



第３号土壙遺物出土状況

第４号土壙

第５号土壙

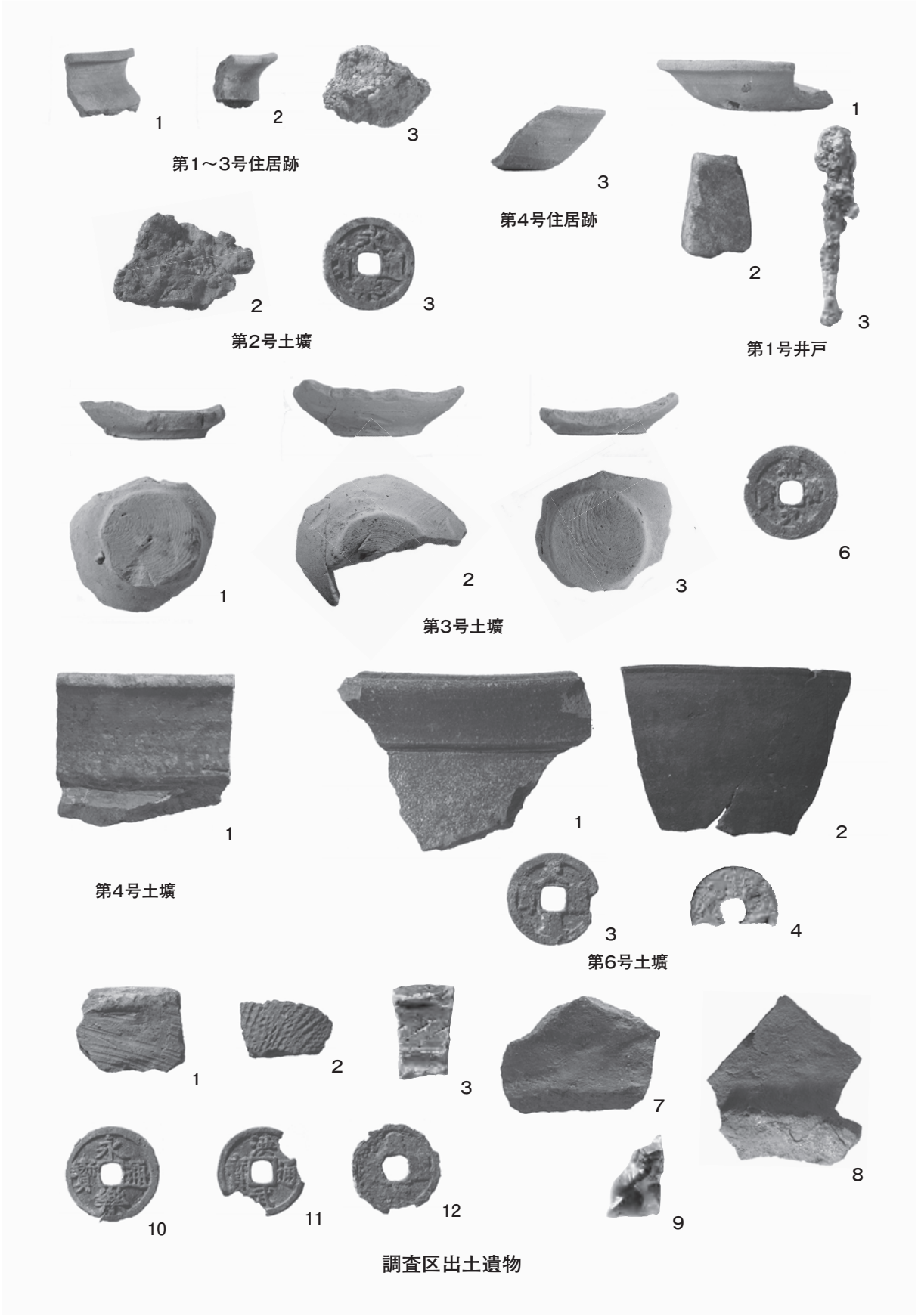


第６号土壙

第６号土壙遺物出土状況（１）

第６号土壙遺物出土状況（２）

図版４


1
2
3
第1～3号住居跡
1
3
第4号住居跡
2
3
2
3
第2号土壙
第1号井戸
1
2
3
6
第3号土壙
1
1
2
第4号土壙
3
4
第6号土壙
1
2
3
7
8
10
11
12
9
調査区出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばしとけじょうせき
書名	千葉市土気城跡
副書名	㈱エヌ・ティ・ティによる携帯電話無線基地建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	菊池健一
編集機関	財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所在地	〒260－0814　千葉市中央区南生実町1210　TEL 043(266)5433
発行年月日	2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
土気城跡（とけけじょうせき）	千葉市緑区（ちばしみどりく）土気町（とけちょう）1210他	12104	緑区－76	35°31′41″	140°17′42″	20070702～20070723（本調査）	212.9㎡	携帯電話無線基地建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土気城跡	包蔵地 集落跡 城跡	縄文 古墳 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡　４軒 溝状遺構　１条 掘立柱建物跡　５軒 土壙　６基 ピット　90基 地下式壙　１基 井戸　２基	剥片、縄文土器（中期・後期） 土師器・須恵器・鉄器 かわらけ・陶器（常滑焼）	中世の遺構が検出された。

要約

土気城跡は過去４回調査されている。この内、今回の調査地点は三の曲輪内に含まれる。この曲輪内での調査は昭和62年に千葉市教育委員会が東京電力による送電鉄塔工事建設に先立ち行われている。

今回の調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡４軒と溝状遺構１条、中世と考えられる掘立柱建物跡５軒、地下式壙１基、井戸２基、土壙６基、ピット90基が検出された。検出された竪穴住居跡から奈良・平安時代の時期には集落の一部であった事が明らかになった。中世頃の時期については掘立柱建物跡や地下式壙・井戸が造られた場所であり、土気城に関連する遺構群であった事が推測され、土気城の三の曲輪の内でも居住域であった事が窺える。

千葉市土気城跡

平成20年３月31日発行

編集・発行　株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-11-1
財団法人　千葉市教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210
TEL 043-266-5433

印　　刷　株式会社　弘報社印刷
〒266-0026 千葉市緑区古場町474-268
ちば印刷団地内
TEL 043-268-2371